



京大広報

No. 607

2005. 12



留学フェア2005
—関連記事 本文2050ページ—

目次

〈大学の動き〉

- 平成18年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施……………2050
- エジンバラ大学との学術交流……………2050
- 京都大学留学フェア2005の開催……………2050
- 京都大学地域講演会「大阪講演会」を開催……………2051
- 「教育研究推進本部」, 「経営企画本部」の設置……………2051
- 平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブの採択結果……………2052
- 平成17年度「原子力システム研究開発事業」の採択結果……………2052

〈部局の動き〉

- 「卒後3年次以降の専門医育成システムと今後の新しい医師循環システム構築について」
—京大関係病院長協議会定例総会で意見交換—
……………2053

〈寸言〉

- 「異分野」との対話～分野を超えて出会うこと～
色平哲郎……………2054

〈随想〉

- これからの日本と外国人労働
名誉教授 菊池光造……………2055

〈洛書〉

- 大学キャンパスと文化財 清水芳裕……………2056

〈荣誉〉

- 沢田敏男名誉教授が文化勲章を受章……………2057
- 眞崎知生名誉教授が文化功労者に選ばれる……………2058
- 坂口志文再生医科学研究所教授が武田医学賞を受賞……………2059
- 永田和宏再生医科学研究所教授が京都新聞大賞文化学術賞を受賞……………2059
- 医学教育等関係業務功労者の表彰……………2060

〈訃報〉

- ……………2061

〈日誌〉

- ……………2062

〈話題〉

- 原子炉実験所が「アトムサイエンスフェア」を開催……………2062
- 京都大学未来フォーラム(第18回)を開催……………2063
- 工学研究科博士後期課程交流セミナーを開催……………2063

〈お知らせ〉

- 「アスベスト問題・京都シンポジウム」……………2064

〈編集後記〉

- ……………2064

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

平成18年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成18年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成18年1月21日（土）および22日（日）の両日に実施される。

このため、本学では1月20日（金）の授業を休止する。

試験の概要は、次のとおりである。

- | | |
|------------------------|------------------|
| 1. 期日および試験教科 | 本部第3試験場（法学部） |
| 1月21日（土） | 本部第4試験場（工学部） |
| 公民，地理歴史，国語，外国語，英語リスニング | 吉田南第1試験場（文学部） |
| 1月22日（日） | 吉田南第2試験場（農学部） |
| 理科①，数学①，数学②，理科②，理科③ | 吉田南第3試験場（総合人間学部） |
| 2. 試験場（実施担当学部）および受験者数 | 医学部試験場（医学部） |
| 理学部試験場（理学部） | 薬学部試験場（薬学部） |
| 本部第1試験場（教育学部） | 受験者数 3,547 人 |
| 本部第2試験場（経済学部） | |

エジンバラ大学との学術交流

本学と連合王国のエジンバラ大学は、大学間学術交流協定の締結について協議を重ねてきたが、このたび本学と同大学の教育・研究の交流と協力を推進するための「学術交流に関する一般的覚書」を交換した。

エジンバラ大学との「覚書」は、本学尾池和夫総長とエジンバラ大学Timothy O'Shea学長の署名に

より、平成17（2005）年10月20日（木）に交換された。

同大学は1583年に創設された総合大学。人文・社会科学，医学・獣医学，科学・工学の3学系に21の学部・大学院があり，国内でも最大規模の研究型大学。教職員数は2,500人。学部生は13,000人。院生は7,000人。ホームページは<http://www.ed.ac.uk/>

京都大学留学フェア2005の開催

京都大学として、学生に海外留学の情報を提供するイベント「京都大学留学フェア2005」が11月4日（金）に百周年時計台記念館において開催された。本フェアは、初めて開催された昨年に引き続き、受入留学生に比べて少数にとどまっている日本人学生の派遣を推進するために、本学の留学プログラム等の紹介に加えて、各国文化機関・団体の協力を得て、各国情報，学部・大学院留学，インターンシップ留学，ボランティア留学，語学研修まで、さまざまな留学情報を提供する催しとなった。

オリエンテーションでは、尾池和夫総長の挨拶の



留学相談ブースで説明を受ける学生

後、本学の派遣留学の体験者から、“先輩に聞く留学体験談”として実際の留学の様子が語られた。その後、2階の国際交流ホールには、アメリカ大使館、オーストラリア大使館、オランダ王国大使館、スウェーデン大使館、ドイツ学術交流会、在大阪中国総領事館、日韓友好協会、関西日仏学館、ニュージーランド大使館、ブリティッシュ・カウンシルなど22の留学相談ブースが設けられ、また本学教員や参加機関が実施するテーマ別のセミナーが時計台記念館内各会場で実施され、半日のフェアに約500名の学生の参加があった。



テーマ別セミナーの様子

京都大学地域講演会「大阪講演会」を開催

本学が有する知的財産を全国に発信し、広く地域社会との連携、協力を深めることを目的に、京都大学教育研究振興財団の後援を得て、平成10年度から毎年行っている地域講演会を、今回は大阪市において、「大阪京大クラブ」の協力を得て11月26日



健康づくりについて講演する笹田教授

(土)に開催した。

講演会では、尾池和夫総長が挨拶を兼ね「京都大学の今」と題して、本学の教育、研究、医療、学生の課外活動などについてスライドを用いてわかりやすく紹介された。続いて、笹田昌孝医学部保健学科長から「健康づくりの京大方式」をテーマに、痛風などの具体的な疾病を例にあげ、健康づくりは常日頃からの予防が大切であり、また、加齢とうまく付き合うには、脚力を保つことが第一で、そのためには毎日かささず30分以上の散歩を続けることを奨励された。約90名の参加者はメモをとりながら真剣に聞き入っていた。

最後に行われた質疑応答では、病院での検査結果など日頃から疑問に思われていることについて活発に質問があり有意義な講演会となった。

「教育研究推進本部」、 「経営企画本部」の設置

本学では、事務改革の一環として、これまでの事務本部を11月から学生支援、教務、国際交流、研究推進、産学官連携等の全学的な推進、支援を行う「教育研究推進本部」と、総長、役員会を中心とする戦略的な意思決定の支援や広報・渉外、リスク管理等の組織管理、全学の施設・情報インフラ整備計画立案を行う「経営企画本部」に再編成した。

11月29日(火)、本部棟玄関において、尾池和夫総長、各理事、学内関係者出席のもとに、二つの本部の銘板除幕式を行い、尾池総長から両本部の設置について挨拶があった。



本部棟玄関にて(右から木谷理事、尾池総長、小松総務部長)

平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブの採択結果

「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、文部科学省が、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な教育の取組を重

点的に支援するもので、公募によって決定される。文部科学省は今年度分として、45大学97件を採択、うち、本学からは人社系1件、理工農系3件、医療系2件の計6件が採択された。

分野（系）	教育プログラムの名称	主たる研究科専攻名・取組実施担当（責任者）
人 社 系	理論・実践融合型による教育学の研究者養成	教育学研究科教育科学専攻 鈴木 晶子 教授
理 工 農 系	学際的エネルギー科学研究者養成プログラム	エネルギー科学研究科 エネルギー社会・環境科学専攻 坂 志朗 教授（専攻長）
〃	社会との協創による情報システムデザイン	情報学研究科社会情報学専攻 石田 亨 教授（専攻長）
〃	化学教育トリニティ	工学研究科高分子化学専攻 伊藤紳三郎 教授
医 療 系	横断型系統的医学研究キャリアパス形成	医学研究科内科系専攻 成宮 周 教授（医学研究科長）
〃	生命・化学情報に基づく融合創薬研究者養成	薬学研究科創薬科学専攻 半田 哲郎 教授（専攻長）

平成17年度「原子カシステム研究開発事業」の採択結果

「原子カシステム研究開発事業」は、革新的原子カシステムの実現に資することを目的とした研究課題を募集し支援する文部科学省の新規事業で、この事業に関する募集、審査等に係る執行管理業務は、科学技術振興機構に委託されている。初年度である今年度は、「基盤研究開発分野」と「特別推進開発分野」について、革新技術審査委員会および若手対

象審査委員会において審査のうえ、革新技術創出型研究開発13件、若手対象型研究開発24件、合計37件の課題が採択された。

本学からは、革新技術創出型研究開発2件、若手対象型研究開発4件が採択された。

研究開発課題名	研究代表者名	研究期間
原子カシステム高効率化に向けた高耐食性スーパー ODS 鋼の開発	エネルギー理工学研究所 木村 晃彦 教授	5年
先進複合材コンパクト中間熱交換器の技術開発	エネルギー理工学研究所 小西 哲之 教授	5年
ガス冷却高速炉用高燃焼度燃料の開発	エネルギー理工学研究所 檜木 達也 講師	3年
不溶性陽極を用いた革新的酸化物乾式再処理プロセス技術の開発	エネルギー科学研究科 後藤 琢也 助手	3年
中性子照射環境に於けるセラミックスの熱伝導率評価に関する研究開発	大学院工学研究科 秋吉 優史 助手	3年
時間・空間スケラビリティを備えた統合原子シミュレーション	大学院工学研究科 附属量子理工学研究実験センター 青木 学聡 産学官連携助手	3年

部局の動き

「卒後3年次以降の専門医育成システムと今後の新しい医師循環システム構築について」—京大関係病院長協議会定例総会で意見交換—

医学部附属病院では、10月15日（土）に京大関係病院長協議会定例総会が、医学部百周年記念施設である芝蘭会館を会場とし関係病院143施設の病院長、本学関係者を含め170人あまりが参加して開催された。

総会では、来年4月からの卒後3年次以降の専門医育成に関し、「卒後3年次以降の専門医育成システムと今後の新しい医師循環システム構築について」と題したパネルディスカッションを行い、本院および各関係病院から、それぞれ現状と課題について発表の後、協議に移った。

特に、国立大学病院長会議における卒後臨床研

修委員会の委員長である平出 敦医学教育推進センター教授からは、現在委員会で議論されているレジデント（仮称）について、診療チームでリーダーシップを発揮できる人間性豊かな専門医の育成・地域医療を実践する心と技能をもった実力のある専門医の育成が必要であり、そのため大学病院、地域医療機関、大学院を通して専門医を養成していくシステムが必要であることが発表された。その後、意見交換を行い国立大学病院長会議のレジデントに対する考えを参加した病院に広く伝え、理解と協力を得ることができた。

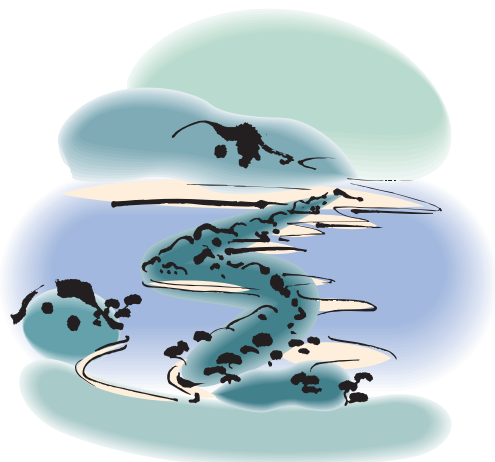
（医学部附属病院）



国立大学病院長会議で議論されているレジデントについて説明する平出医学教育推進センター教授



京都大学における卒後3年次以降の専門医育成について説明する千葉勉副病院長



寸言

「異分野」との対話
～分野を超えて出会うこと～

色平 哲郎

人口1,300人の鉄道も通っていない信州の山村の診療所長になって、そろそろ十年目を迎えようとしている。医者仲間は「よくやってるなあ」と半ば呆れたように言うが、私にとって高齢化率38%の過疎の村は「医療の最前線」だ。手前味噌を承知で



いえば、そんな村にいるからこそ「日本」がよく見える。そんな意識を持ち続けてこられたのは「異分野」との出会い、交流を自分なりに大切にしてきたからではないか、と思っている。

異分野の友人のひとりにノンフィクション作家の山岡淳一郎がいる。彼は「命に値段がつく日」（中公新書ラクレ）の共著者なのだが、たまに山を降りて会うと、刺激的な話を聞かされる。あるとき彼は「大都市の近郊に信州の山村よりも寂しい村ができています。21世紀の『楢山節考』の舞台になるな」とボソツと言った。「どこだよ？」と訊ねると、「ニュータウン」と山岡は答え、次のように言葉を続けた。「60～70年代に大都市集中の受け皿としてつくられたニュータウンの団地は、深刻な『ふたつの老い』を抱え込んでいる。住民の高齢化と建物の老朽化だ。コミュニティの危機とエレベーターもなく、修繕もままならない建物の疲弊、両方だね。この問題に国は『建て替え推進』で臨んでいるが、年金生活の住民たちは経済的余裕がない。建て替えに参加できず、強制的に住戸を買収され、社会の底辺に散っていく。大変な問題になる。」彼の話聞き、私のなかで、大都市の周縁と山村との心理的距離感が一気に縮まった。

「医療問題とも密接に絡んで。一次から三次まで、どんな医療体制を敷くか、だな。信州の僕の村では過疎の悲哀と引き換えに顔と顔の関係で支えあう『互助の網』が機能しているから、基幹病院と診

療所が「あうんの呼吸」で患者の受け渡しをできる。地域コミュニティがあるからね。何とか、ご老人が自分らしく生きる道が残されているが、ニュータウンで歳をとり、そこから追い出された人たちは、終の棲家をどこに置けばいいか……深刻だね」「スクラップ&ビルドは、経財政的にアウトなのに建設界はその一点張りさ。いきなり建物を壊すのではなく、維持管理して長く使いつつ、コミュニティの世代交代を進める、もうひとつの突破口を作る必要があるが、都市を経営、熟成する原理原則が確立されていない。用地頼み。日本に都市計画はない。建築が『近代』を卒業したと思ったら大間違いだ。大量生産&消費、高速、中央集権の装置としての近代都市を、人間の生活の側から見直す軸を構築しないと大事になる。土地の需給状況、人口動態からみて、もう地価が全国的に高騰することなどありえないのだからね。明日のための『知』は現場にあるんだよ」と、山岡が応える。

異分野の人たちと私が積極的に交流するのは、偏屈な「医師像」に収まりたくない気持からである。

医学部生だったころ、戦争で日本中が焼け野原になった「原点」を見たいと思い、北京市内から路線バスを乗り継いで「盧溝橋」に行った。そこでたまたまミュンヘン大学医学部の女子学生と知り合いになり、互いの国が背負う戦争の歴史について語りあった。私は、当然のように母校が関与した「七三一部隊」について話した。すると、彼女は、劇作家のプレヒトを引いて、このような言葉を返してきた。「あなたやわたしが帝国主義の時代に生まれていたら、そのような蛮行に加担しなかったと明確にいえるかしら。歴史的な感覚として蛮行を糾弾すべきだけど、それは、いま、ここでの安全が保障されているから言えること。状況の裏側をしっかり認識しなくちゃ」医学知識で頭がコンクリート詰めになりかけていた私は、その歴史認識の深さに圧倒された。もっと人間を知りたいと思った。これが異分野へのまなざしの原点かもしれない。

（いろひら てつろう 南相木村診療所長 平成2年医学部卒業）

随想

これからの日本と外国人労働

名誉教授 菊池 光造

2005年10月末から2週間以上わたって、断続的に続いたフランスにおける移民暴動の報道には、われわれも多くのことを考えさせられた。フランスは1970年代初頭にいたるまで、移民の受け入れには

比較的寛容であり、旧植民地圏を中心に、大量の移民を受け入れてきた。フランス政府としては、「統合政策」によって移民をフランス社会に同化し溶け込ませようと試みてきた。そして国際的に見れば、フランス社会は比較的人種差別などの少ない社会と考えられてきたとあってよいだろう。しかし、現実には、大都市周辺の移民居住地区では、失業率も極めて高く貧困を克服することができず、その中で将来への夢を失った若者たちを中心に、今回の暴動が拡大したのであった。ここには欧米先進社会における外国人労働者・移民受け入れの難しさが象徴的に現れているとあってよいだろう。

ひるがえって日本についてみれば、いわゆるバブル経済の時期に論議的になった後沈静化していた外国人労働力導入論が、近年再加熱しているといえる。その背景にはいくつかの事情がある。短期的には景気回復の兆しとともに、産業界では安価で忍耐強く働く外国人労働を求める圧力が高まる傾向にある。また新たな要因としては、近年のアジア諸国との自由貿易協定（FTA）交渉の過程で、アジア諸国から労働力受入れを要求され日本国としての態度決定を迫られているという事情がある。

一方、日本が急速に少子高齢化の道を歩み人口減少社会に向かいつつあり、ロングランで見れば21世紀が労働力不足、人手不足の時代だということは周知の事実であり、長期視点ではこれへの対応を考えねばならないだろう。こうした事情の下で「労働開国」、外国人労働力導入・受け入れをめぐる論議が

加速しているのである。平成16～17年にかけては、産業界・財界団体から相次いで外国人労働者導入に関する提言が発表され、政府機関でも真剣な検討に入っているのが現状である。

日本政府はこれまで、専門的知識・技術などを持つ者については積極的に受け入れるが、単純・不熟練労働力の受け入れは社会的影響を考慮して慎重に対応するという原則で臨んできた。これは正しかったと私も考えている。だが、一般にはあまり知られていないことだが、バブル以降今日に至るまで、長期不況の間もわが国における外国人労働者は、正規就労・不法就労を含めて一貫して増加し続けてきたのである。今後の外国人労働問題、とりわけ未熟練・不熟練者の導入を論じるにあたっては、少なくとも次の点を考慮しておく必要があるだろう。

まず何よりも、日本の経済的都合だけでこの問題を考えることはできない。「外国人労働者は出稼ぎでありやがて帰国する」と考えるのは安易な思い込みである。出身国と日本の間に経済格差・生活水準格差がある限り、外国人労働者は不法滞在・不法就労さえいとわずに日本に滞在し続け、家族親族の呼び寄せ、日本での結婚による家族形成等によって何世代にもわたって生活し続けることになるであろう。このことは、ドイツ、フランスなどでの経験からして明らかである。この点を当初から考えておかねばならないだろう。だとすればつぎに、われわれは外国人労働者の人権を十分に認め、平等な社会的権利を保障して差別なく隣人として受け入れ、子々孫々にいたるまで共生していく覚悟があるだろうか。その心構えなしに労働力需給の視点から大量の外国人労働者導入を急げば、やがて日本社会にも深刻な問題を生み出す可能性が極めて高いといわねばならない。いずれにしても冒頭で触れた今回のフランスでの事態を他山の石として、いま日本でも外国人労働者導入・移民受け入れ等の問題をじっくり考えるときが来ているように思われる。

（きくち こうぞう 元大学院経済学研究科教授
平成12年退官 専門は社会政策学）

洛書

大学キャンパスと文化財

清水 芳裕

都市化の波や設備の拡大から、多くの大学で、移転や新しい用地の確保が大きな課題となっている。桂キャンパスの場合も例外ではない。国立大学が設けられた当時、敷地がどのようにして選ばれたのか、それぞれに地域や社会の事情があったのであろうが、文化財との関係からなげめると、用地の決定にあたっての背景やその後の土地利用の面に、いくつか類似点があることに気づく。

まず敷地の前史をみてみよう。京都大学の本部と北部の構内には、幕末の動乱期にそれぞれ尾張藩と土佐藩の京屋敷があった。当時の絵図からその規模がわかるほか、屋敷の周囲にめぐらされた濠の跡や、藩の地名を印した瓦などが発見されている。また東京大学では、本郷構内の大部分の範囲が、江戸時代を通じて加賀藩や水戸藩の江戸屋敷であり、建物の配置や生活用具などが発掘によって明らかになっている。そのほか、東北大学の片平地区は、伊達騒動で知られる仙台藩の家老原田甲斐（宗輔）など家臣たちの屋敷町であり、移転前の金沢大学は城跡を敷地とした。いずれも近世の歴史をきざんだ重要な文化財を残す場所であるが、大学の用地とされた背景には、明治以後に官有地あるいはそれに類するものとして、国の施設に利用しやすいことなど、共通した要因があったようにみえる。

さらに古い時代の文化財との関係にも、やはりそれぞれによく似た現象がある。京都大学の北部構内には、ほぼ全域にわたって縄文時代の遺跡が残っている。農場の付近では炉をともなった竪穴住居やトチの実を集めた貯蔵穴が、理学部の附属植物園の一面では墓地が発見されている。また和歌山県白浜町の瀬戸臨海実験所には、海水から塩を作った炉や専用の土器などを出土する、奈良時代の製塩遺跡がある。そのほか、高槻市の安満農場は、西日本では有

数の大きさをもつ弥生時代の集落跡として知られている。このような環境につよく依存した時代の人々が活動した場所と、今日のフィールド科学の分野が利用している敷地との関係は、自然への適応やその活用をめぐる、時をこえた普遍性があることを教えている。

同じような関係は、いくつもの事例からみることができ。東京大学理学部の附属植物園は、文京区に16ヘクタールという広大な敷地をもち、小石川植物園という名称として、あるいは青木昆陽が甘藷の栽培を試みたところとして著名であるが、そこには、大森貝塚の発掘で知られるアメリカの動物学者モースが調査をした縄文時代の集落跡がある。東京の地形に特有ななだらかな傾斜をもつ園内の、もっとも高い平坦部で竪穴住居が発見されている。またクラークの提唱をもとにして生まれた北海道大学の農学部附属植物園は、北方生物圏フィールド科学センター植物園と名称を変えているが、その広い園内には古代の集落跡が残っている。同様の遺跡は大学の北半にもあり、「遺跡保存庭園」として整備され、竪穴住居のなかには、今も地表に窪みをとどめているものがある。

このように、大学の敷地をめぐるには、多くの諸例をあげるまでもなく類似した要素が認められる。それは選地にあたっての偶然から生じたわけではないようである。環境に大きく依存した、古い時代の遺跡が残されているキャンパスは、現在もそれぞれの地形や自然の特性を生かして、農場、臨海実験所、あるいは植物園などの分野に活用されているものが多く、歴史をこえた深いつながりをそこにみることができる。科学技術に支えられた今日の社会にあっては、あたかも過去や自然と無縁であるかのような錯覚をおこしがちである。しかしその基盤には、人の活動をとりまく自然との関係が連綿とつづき、われわれはそれから解き放されてはいないということを、学内に残る文化財の存在から、ふと感じることがある。

(しみず よしひろ 埋蔵文化財研究センター助教授、専門は考古学)

栄誉

沢田敏男名誉教授が文化勲章を受章

沢田敏男名誉教授は平成17年度文化勲章を受章され、去る11月3日（木）宮中正殿松の間にてその親授式が行われました。農学研究科としては木原 均（昭和23年）、今西錦司（昭和54年）、満田久輝（平成6年）の各先生に次いで嬉しい受章であります。以下に同名誉教授の略歴と業績を紹介します。

沢田敏男名誉教授は、昭和17年9月京都帝国大学農学部を卒業の後兵役を経て、昭和21年終戦後の京都帝国大学の研究嘱託となられた。その後岡山農業専門学校教授職を経て昭和34年には京都大学農学部教授に就任され、農業工学科・農業施設工学講座を昭和54年12月まで担当された。

先生の研究の大要は今回受章の対象となっている農業水利を目的とする灌漑用ダムや取水堰・用排水路ならびに干拓の諸施設の設計施工に関する理論考察と実践である。先生は昭和30年「浸透水の流動に関する研究」で農学博士の学位を得られたが、これは貯水ダムの一つのタイプであるフィルダム建設の基礎をなす理論である。更にコンクリートで建設するダムに関しては1970年代から急発展した数値解析法の積極活用に尽くされた。これらの成果の主なもののは国営の農業水利事業で建設した永源寺ダムや呑



吐ダムに実現している。これらの業績に関し、昭和58年農業土木学会賞、同59年日本農学会賞の受賞があり、同62年の学士院賞（貯水ダムの設計に関する研究）へと続き、平成元年には学士院会員になられた。

また先生の文教行政に対する貢献は、昭和54年から昭和60年の間、第20代京都大学総長の重責を務められたことに始まり、昭和61年から平成7年まで（特）日本学術振興会の会長職を受けられ、この間同62年から4年間大学設置・学校法人審議会会長職を兼務され、その後平成8年から13年まで（財）国際高等研究所長職へと続いた。このような業績に対し、平成3年には勲一等瑞宝章が授与され、平成6年には文化功労者顕彰を受けられた。

最近、先生は農業水利の進展を通じた農村社会の豊かな発展を志向し都市と農村の共生に論及され、様々の分野で発言されている。これらの活動に対し平成15年には国際水田水環境工学会・国際賞も受賞された。

（大学院農学研究科）



眞崎知生名誉教授が文化功労者に選ばれる

眞崎知生名誉教授が平成17年度文化功労者に選ばれました。

以下に同名誉教授の略歴・業績等を紹介します。

眞崎知生名誉教授は、昭和37年東京大学医学部を卒業、一年間のインターン修了後、東京大学大学院医学研究科博士課程に入学、同41年に退学後、ただちに東京大学医学部助手に採用された。昭和



50年筑波大学基礎医学系教授に転出、平成3年1月より京都大学医学部教授併任となり、同年4月京都大学医学部教授に就任、平成10年3月の退任まで同職を務められた。平成9年4月より国立循環器病センター研究所所長を併任し、平成10年4月より専任となり、平成12年停年退官された。平成10年4月京都大学名誉教授の称号を受けられ、平成15年4月からは大阪成蹊大学学長として活躍しておられる。

今回の受賞の対象となった業績は「エンドセリン（内皮由来血管収縮因子）の同定とその生理活性」である。

眞崎名誉教授の研究は、骨格筋、心筋、平滑筋、血管、血管内皮細胞と拡がり、それぞれの段階で大きな業績をあげている。最初、江橋節郎氏（東京大学名誉教授）のもとで同氏の発見した筋のアクトミオシンについてその収縮増強因子、アルファアクチニンを精製、これが全く新しい蛋白質であることを発見した。さらに、その物理化学的性質、生物活性、その全一次構造、細胞内局在、分子種とその意義などについて一貫してこの研究を続けている。また、筋の蛋白質が筋発生分化の過程で分子種の変換を行うことを示した。この研究成果も国際的にきわめて高い評価を得、その後の筋蛋白質の遺伝子発現の研

究の爆発的な展開を促した。さらに平滑筋を中心とする研究へと進んだ。この研究の中から構造蛋白質、M蛋白質の発見、いくつかの筋構造蛋白質の全一次構造決定と、その推定高次構造の発表は高く評価されている。

また、この研究の過程で、内皮由来の強力な血管収縮因子を単離精製、構造決定し、これをエンドセリンと命名した。このエンドセリンの化学構造、生物活性、3種の分子種の存在、受容体のクローニング、その構造解析、細胞内合成経路、細胞内情報伝達系の解析、またその生理的、病態生理的意義の解明などの仕事を組織的にきわめて短時間に行い、世界の多くの研究者の注目を集めた。エンドセリンは血管の機能調節機構に新しい概念を導入すると同時に、循環系以外でもこのペプチドが重要な働きをしていることが示され、生命科学分野全体に大きな影響を与えている。また、エンドセリンの発見によって血管生物学という新しい学問分野が形成されることとなった。

さらに、血管内皮細胞から酸化LDL受容体の遺伝子を単離することに成功し、この分子の構造および機能を解明した。この分子が動脈硬化症の発症・進展において非常に重要な役割を果たしていることを明らかにすることにより、心血管性病変の根本的病態である動脈硬化症に関する研究において新たな研究領域を開拓された。

以上のように眞崎名誉教授の目ざましい業績を考えると、その受賞はまことに喜ばしい。

(大学院医学研究科)

坂口志文再生医科学研究所教授が武田医学賞を受賞

このたび、坂口志文再生医科学研究所教授が武田医学賞を受賞され、東京ホテルオークラにて、11月14日（月）に授賞式が行われました。

坂口教授の受賞理由は免疫応答のブレーキ役となるリンパ球（制御性T細胞）を発見し、制御性T細胞の機能、各種免疫疾患における役割の解明、さらにこの細胞の発生の鍵となる遺伝子を同定した業績に対するものです。

武田医学賞は武田薬品工業株式会社が1954年から実施して以来、武田科学振興財団に引き継がれて、我が国の民間財団の医学賞として最も歴史が古く、権威の高いものです。同財団選考委員会は、医学界において顕著な業績を挙げ優れた貢献を果たされた方2名を選び、坂口教授に同賞が授与されました。

以下同教授の略歴と業績を紹介します。

坂口志文教授は、昭和51年京都大学医学部を卒業、同年同大学大学院医学研究科に進学、同58年京都大学医学博士の学位を授与された。京都大学医学部卒業後は、同大学医学部附属病院医員等を経て、外国の大学や研究所の研究員等を歴任したあと、平成4年新技術事業団「さきがけ研究」専任研究員、同7年東京都老人総合研究所免疫病理部門長、同11年より京都大学再生医科学研究所教授に就任し、現在に至っている。

坂口教授は、平成15年に持田記念医学賞を受賞、同16年に米国Cancer Research Instituteより、



William B. Coley賞を受賞している。

坂口教授は、正常な個体中に存在し、自己免疫病、アレルギーなどの免疫疾患の発症を抑制しているリンパ球として制御性T細胞を発見し、その機能、発生過程の分子的基礎を明らかにした。この細胞群を増殖、機能強化することにより様々な免疫疾患の発症を阻止できること、また移植臓器に対する拒絶反応を抑制できることを示した。逆に、この抑制性細胞群の減少、機能弱化により癌細胞に対する免疫応答を惹起、強化できる可能性を示した。

ヒトの免疫疾患の克服に向けて坂口教授の今後の活躍が期待される。

（再生医科学研究所）

永田和宏再生医科学研究所教授が京都新聞大賞文化学術賞を受賞

平成17年度京都新聞大賞文化学術賞が京都新聞社より永田和宏再生医科学研究所教授に授与され、11月28日（月）に贈呈式が京都新聞文化ホールで行われました。同賞は、文化・学術の分野でめざましい業績を挙げた京都府又は滋賀県に在住する個人または団体に贈られるものです。

今回の受賞は、永田教授が歌人として出版した第八歌集「風位」が歌壇の内外で高い評価を受けたことや歌人としての優れた活動を続ける一方、多くの若手歌人を育てるなど短歌の普及に努め、これら一連の短歌活動が評価されたものです。さらに、永田教授が細胞生物学者としても「分子シャペロン」「細胞内タンパク質の品質管理機構」などの研究で受けている、国内外での高い評価もあわせて受賞の理由とされました。

以下に同教授の略歴、業績等をご紹介します。

永田和宏教授は、昭和46年に京都大学理学部物理学科を卒業後、森永乳業中央研究所研究員、京都大学結核胸部疾患研究所講師、米国国立癌研究所客員助教授を経て同61年京都大学結核胸部疾患研究所教授に就任、平成10年再生医科学研究所教授となり現在に至っている。また、永田教授は、若年より歌人として高く評価され、平成4年からは高安国世元京都大学教授（ドイツ文学、歌人）を継ぎ、「塔」短歌会の主宰となって会を率いている。



永田教授（歌人）は、第八歌集「風位」により平成16年3月に文化庁が芸術分野でその年に優れた業績をあげ、新生面を開いた人に贈る芸術選奨の文部科学大臣賞（文学部門）を受賞し、同年6月には歌壇で最も権威があるとされる「迢空賞」を受賞された。昭和50年に刊行した第一歌集「メビウスの地平」以来第八歌集「風位」に至るまで、作品は歌壇で高い評価を受けており、上記2賞以外にも主なものでは「寺山修司短歌賞」「若山牧水賞」「読売文

学賞」「日本歌人クラブ賞」などを受賞されている。そのほか、短歌研究の多数のすぐれた著作、評論を発表するとともに、短歌の一般への普及のために、「朝日新聞」「京都新聞」をはじめとする新聞歌壇、NHKテレビの「NHK歌壇」の選者を務め、平成16年からは宮中歌会始詠進歌の選者も務めておられる。

また、永田教授は細胞生物学者としての評価も高く、特に「分子シャペロン」「ストレス応答」「タンパク質品質管理」などの分野においては、わが国を代表する研究者として高い評価を受けている。永田教授の発見したHSP47はコラーゲンに特異的な分子シャペロンとして、初めて基質特異的分子シャペロンという概念を明確に確立された。また小胞体におけるタンパク質の品質管理機構に関しては、新しい認識分子EDEMを発見するなど、世界的にも大きな注目を集めた。特定領域研究「分子シャペロン」の領域代表、国際学会 Cell Stress Society Internationalの会長を務め、この分野の進展に貢献し、平成14年からは日本細胞生物学会会長をも務めておられる。

（再生医科学研究所）

医学教育等関係業務功労者の表彰

安カ川 絹子技術職員（医学部附属病院看護部副看護部長）は、医学に関する患者診療等に係る補助的業務に関して顕著な功績があったことにより、11月21日（月）文部科



学大臣より平成17年度医学教育等関係業務功労者の表彰を受けられた。

（医学部附属病院）

訃報

このたび、島^{しま} 進^{すすむ}工学研究科教授、内田^{うちだ} 俊郎^{しゅんろう}名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に両氏の略歴、業績等を紹介いたします。

島 進 工学研究科教授



島 進先生は、8月13日逝去された。享年62。

先生は、昭和40年京都大学工学部を卒業後、東京三洋電機(株)に就職、2年の企業経験の後、同43年京都大学工学部助手、その間英国インペリアルカレッジに留学し修士号を取得、帰国後、同51年には京都大学工学博士の学位を授与された。昭和55年には京都大学工学部助教授、同63年同教授に就任された。

先生の専門は塑性加工関係全般におよび、特に粉体および多孔質体の圧縮成形材料の塑性変形理論の開発や塑性加工プロセスの知能化および加工成形プロセスの計算科学に関する研究においてすぐれた業

績を上げられるとともに、当該分野の教育に力を注ぎ、数多くの研究者・教育者を輩出された。特に先生の開発した圧縮性粉末・多孔質材料の変形特性を支配する式は、島-大矢根の式として世界的な標準モデルとなっており各界より高い評価を受け、昭和55年には粉体粉末冶金協会から研究進歩賞を、平成5年には同協会より研究功績賞を授与されている。平成11年には日本塑性加工学会 学会賞会田技術賞を、同15年には、IPMMより J. Keith Brimacombe Award を授与されている。

先生は、日本塑性加工学会理事・関西支部幹事、粉体粉末冶金協会副会長・理事等を歴任され、塑性加工および粉体成形分野の発展に尽力された。

(大学院工学研究科)

内田 俊郎 名誉教授



内田俊郎先生は、11月2日逝去された。享年92。

先生は、昭和11年に京都帝国大学農学部農林生物学科を卒業、同大学院に進学、昭和19年に退学し、農学部副手嘱託を経て、同年に京都帝国大学助手に採用された。その後、助教授を経て、昭和23年に京都大学農学部教授に就任された。昭和52年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。その間、学生懇話委員やウイルス研究所協議員などの各種委員および教室主任を歴任された。

先生は、日本における動物個体群生態学の発展の礎石を築いた研究者として世界的に著名である。アズキゾウムシの実験個体群に関する精緻な解析的研究、アズキゾウムシとその寄生蜂との相互作用や近縁種ヨツモンマメゾウムシとの種間競争などを組み

入れた種間相互作用の実験的解析、害虫としてのマメゾウムシ類の生活史特性の種内変異に関する研究により達成された数々の業績は、国内外できわめて高い評価を受けてきた。とりわけ、種間相互作用に関する研究成果は、G.F. Gause や C.B. Huffaker の著名な研究と並んで世界の代表的な生態学の教科書で広く紹介されるに至った。その功績により、先生はイギリス生態学会、アメリカ生態学会の両学会の名誉会員に推挙されている。国内でも自ら設立に参画した個体群生態学会の初代会長を務めるなど、長く個体群生態学・昆虫生態学両分野でのリーダーとして活躍し、多くの後進を育成してその国際的発展に多大な貢献をされた。また、害虫管理学という応用場面でも多大な貢献をされ、日本応用動物昆虫学会会長も務められた。これらの業績により、昭和41年に「昆虫個体群の生態に関する一連の研究」で日本農学賞および読売農学賞を受賞されている。

(大学院農学研究科)

日誌 2005.10.1 ~ 10.31

- | | |
|----------------------|-------------------------------------------------------------|
| 10月 3日 役員会 | 14日 学生部委員会 |
| 4日 部局長会議 | 17日 尾池総長, スウェーデンを訪問(23日まで) |
| 6日 職員組合との団体交渉 | 19日 財務委員会(第9回) |
| 7日 尾池総長, 中国を訪問(9日まで) | 〃 国際交流委員会 |
| 〃 大学入試センター試験実施委員会 | 24日 役員会 |
| 11日 役員会 | 26日 メキシコ, José Trinidad Padilla López
グアダハラハラ大学長, 総長他と懇談 |
| 〃 教育研究評議会 | 31日 アメリカ, Roseann Runte オールドド
ミニオン大学長 他2名, 総長他と懇談 |
| 12日 経営協議会 | |
| 〃 企画委員会(第10回) | |

話題

原子炉実験所が「アトムサイエンスフェア」を開催

原子炉実験所では、子どもたちを含めた地域の方々に広く科学に興味を持っていただくため、地元自治体（熊取町，泉佐野市，貝塚市）の教育委員会等の協力を得て「アトムサイエンスフェア」を10月23日（日）に開催した。今年で4回目となる同フェアでは、「放射線を見る道具を作る」，「放射線をはかる」および「わくわく面白実験」という3つの教室に分かれた実験教室と，実験所教授による「巨大地震が関西を襲う－その時，身を守るために－」というタイトルでの講演が行われた。

特に「わくわく面白実験」は，子どもたちに，放射線だけではなく広く科学に興味を持ってもらう目的で，昨年初めて開催されたが，今年も家族ぐるみの多数の参加があり，参加された方々は皆，楽しそうに実験に取り組んだり，熱心に質問したりしていた。

原子炉実験所では，今後も，このような地域の方々が気軽に参加でき，科学と身近にふれあうことのできる場を提供していきたいと考えている。

（原子炉実験所）



今回で4回目を迎えたアトムサイエンスフェアの会場

京都大学未来フォーラム(第18回)を開催

10月27日(木)に時計台記念館・百周年記念ホールにおいて、恒例となった未来フォーラムが開催された。18回目となる今回は、卒業生で華道 未生流 笹岡次期家元 笹岡 隆甫氏を講師に招き、「秘すれば花」というテーマで講演が行われた。

まず、音楽の流れる中、生け花の実演が披露された。上手には五葉松を上下左右に配し、そこに大振りの百合やかすみ草が生けられ、対になる下手には、松の枝やナナカマドなど秋らしい花が生けられた。竹を帆柱に見立てた舟形の器がダイナミックで、大ホールに映えるものである一方、銀色に染められた松の枝は、明るい電気の光に慣れた我々現代人に、ひととき、谷崎潤一郎の陰影礼賛にあるような、日本のあかりを感じさせてくれる演出であった。

講演では、スライドで華道の歴史やご自身の作品の紹介をされ、伝統というものが型にはまるもので

はなく、常に新しいものを取り入れて変わっているのだということ、わかりやすく述べられた。

集まった315名の参加者は、生け花を体験したことのある人も多く、質疑応答にも積極的に手が上がっていた。



舞台上で生け花の実演を披露する笹岡氏

工学研究科博士後期課程交流セミナーを開催

工学研究科は、11月2日(水)に工学研究科桂キャンパスにおいて、「京都大学工学研究科博士後期課程交流セミナー」を開催した。

これは、平成16年度開始の8大学(北海道大学、東北大学、東京大学、東京工業大学、名古屋大学、大阪大学、九州大学、京都大学)工学系研究科共同で取り組む博士後期課程教育のためのGPの一環として実施されたものである。本セミナーは、専攻を超えて学生同士の交流を図ること、自分の研究を専門外の人に的確に伝えられるようスキルアップを図ること、企業から講師を招いて博士後期課程修了者への企業の考え方が理解できること等を目的として

いる。

今回で2回目となるセミナーであるが、学外からお招きした3名の講師を初め76名の参加を得ることができ、大いに実りあるセミナーとなった。

また、企画段階からの大学院生の参画および当日の進行により、よく練られた企画に沿って極めてスムーズに進行し、盛大かつ充実した、極めて有意義なセミナーとなった。参加した大学院生にとっては、専攻の枠を超えた交流を図ることができ、企画力を養うよい経験になったものと思われる。

(大学院工学研究科)



グループ討議



ポスターセッション

お知らせ

「アスベスト問題・京都シンポジウム」 ～もう一步ふみこんで、知り、学び、考える～

1. 日 時：平成18年1月17日（火）15：00～18：00（開場は14：30）
2. 場 所：時計台記念館1階 百周年記念ホール
3. プログラム：

挨拶 講演 地質学、鉱物学的にみたアスベスト 環境衛生学的知見と国の対応 臨床医学的知見と京都大学の対応 飛散抑制と廃棄物に対する工学的知見 講演者による総合討論 閉会挨拶	総長 尾池 和夫 理学研究科 教授 平島 崇男 工学研究科 教授 内山 巖雄 保健管理センター所長 川村 孝 環境保全センター 教授 酒井 伸一 環境安全保健機構長 大寫幸一郎
----------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------
4. 対 象：京都大学教職員・学生・一般
5. 参 加 費：無料
6. 申 込 方 法：学内 メールにて事前申し込み
 学外 当日受付にて先着順（定員 あわせて500名）
7. 申 込 ・ 問 い 合 わ せ 先：京都大学施設・環境部環境安全課環境技術掛
 TEL：075-753-2366（FAX：2355）
 E-mail：kankyogijutu@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
8. 主 催：京都大学環境安全保健機構・環境・安全・衛生委員会

編集後記

広報誌の取材で、理学研究科の飛騨天文台を訪問する機会を得ました。今年は例年より少し早く多くの積雪があったとのこと。里から天文台へのアプローチの道路も1m以上の積雪。除雪された山道を職員の方の手慣れた運転で標高約1,000mの天文台へ到着。白銀の中に観測ドームなどの施設が浮かび上がっていました。職員の方の話によると、「厳冬は始まったばかりでこれからが大変です。」とのこと。研究のためとはいえ厳しい環境の中で自然と闘いながら勤務をされている教職員の方々に敬意の気持ちを抱くとともに日頃のご苦勞に思いをいたしました。本学には遠隔地施設が38施設あります。それぞれの施設ではそれぞれの環境の中で、教育、研究、実験、観測などが日常的に行われています。このような施設をいろんな形で紹介しなければとの思いを強くしました。



65cm 屈折望遠鏡とドームレス太陽望遠鏡（右奥）